

宝塚、思い出のタカラヅカ

二十四回生 奥田 陽一

まえがきに代えて

千里山会の会員の方々には、タカラヅカファンの方が多いことと思います。本稿を書くに当たり23佐怒賀(片山)弘子さんにエッセイを寄せて頂きました。私はチビの時から行っていたので、ある程度内容が理解出来て、この心境になるまで3年は掛かりましたが、ファン共通の思いとして掲載させて頂きます。又、熱心な宝塚ファンの同級生から聞いたジェーン台風の日に宝塚へ行った話も添えております。

「宝塚歌劇への思い」

たしか千二小学校の四年生の頃であったか、仲良しの恵子ちゃんに誘われて初めての歌劇を見に行ったのであった。

小学生二人だけのわくわくどきどきの阪急電車での旅であった。あのあずき色の阪急電車がなんとも懐かしい。十歳の子供には、歌劇の舞台はどこまでも広く華やかで、おそろしいほどの急階段に眼を見張り、大きな羽根のついたきらびやかな衣装にすっかり見とれ

てしまった。何よりも男役のかっこ良さ、春日野八千代さまにすっかり夢中になってしまったのであった。今でもあの時の心のざわめきを大切にしまっている。誘ってくれた愛らしい恵子ちゃんは今も熱心なツカファンで宝塚に通っている。

思い出はまことに良きもの嬉しきもの、八十歳の私をふつくとあたたく灯してくれているのである。

23佐怒賀(片山)弘子さん

ジェーン台風の日に宝塚へ行った話

後年、千二小で同級だった女性から聞いた話です。昭和25年9月3日朝から台風情報は流れていきましたが、お姉さん達と宝塚へ「アラビアンナイト」を観に行かれました。公演が中止にならず、最後まで観られたようですが、帰りは鉄橋(多分神崎川鉄橋)の手前で阪急電車がストップ、鉄橋を歩いて渡り、濁流がすぐ近くに見えて、とても怖かったそうです。それにも懲りず、その後もずっと宝塚ファンでした。

当日は日曜日、父も宝塚へ出勤せず家に居り、長い木の板(当時は殆どの家で常備していた)を雨戸にX字型に打ち付けて風で飛ばない様にしました。昼過ぎに風が強まり、千里山の殆どの家々の瓦が飛び、お稲荷さんの赤い大鳥居やポプラが倒れた日です。父も出勤していたら、服部から千里山まで歩いたことでしょう。

タカラヅカ事始めと父のこと

「タカラヅカ」と聞く度に懐かしい思いが込み上げてきます。年に何回も行ったのは千二小在学中だけ、中学高校時代は部活、試験や受験勉強で忙しく、年に一回も行っておりません。大学に入れて時間が出来、宝塚にはすぐの石橋まで通学していたのに行く機会は少なく、せいぜい後述の新人公演に行ったくらいです。就職後は仕事に追われ「ベルばら」を含めて殆ど行けませんでしたが、その上、万博後の東京転勤で宝塚との縁も切れ、東宝大劇場には一度も行っておりません。高校以来阪急電車での通学・通勤が続き、車内の一番目に付く場所には宝塚の広告があり、毎月の演目や出演者名を、いつも見ておりました。以下年代順に行った覚えのある演目を挙げたいと思いますが、あらずじや出演者を細かく覚えていた訳はなく、誤りもあることをお許し頂きたいと思っております。なお、タカラジェンヌの芸名には敬称を略しております。

私の宝塚観劇の歴史は千二小へ入る前の昭和二十一年に始まりました。家の押し入れには戦前の「歌劇」が積み上げられ、昭和七年発行の「阪神急行電鉄25年史」もありました。

頃に終わります。私のお目当ては、外食券持参で食べる大食堂のお弁当と観劇後の動物園と乗り物でした。

それでも、何度も行くと内にはスターの顔と名前が一致する様になり、筋も大体判る様になると歌やダンスも面白くなり、喜んで母について行く様になりました。ただ、千二小や吹田一中では「タカラヅカ大好き」などと友達に話すと「女好き！」と囃されかねないので一切秘密の「隠れタカラヅカ」です。

三本立ての場合は「春のをどり」など含めて必ず舞踊劇があり、ダンスも多いのですが日本舞踊は天津乙女の独壇場でした。

その頃の大劇場にはかぶり付き五列ほどは白いカバーが掛かった進駐軍専用席、梅田から直通の白い帯を巻いた専用電車が出ておりました。その頃観た進駐軍兵士がタカラヅカのアメリカ公演を見に来てくれたと思います。

その後、虞美人などの大作一本立てでも上演される様になりました。

千二小2年生の時、父が宝塚勤務となり切符の入手は簡単になったようです。父は柔剣道併せて十段、関学ではラグビーもやったそうで、応召三回で無骨その

父が阪急電鉄勤務、母は宝塚の大ファンで、私の生まれる前にも度々宝塚へ行っていたようです。「歌劇」には興味ありませんでしたが、スターの名前をこれ何と読むのとよく母に聞いたそうです。

「阪神急行電鉄25年史」は絵本代わりに隅から隅まで何度も読みました。未だ京都線を京阪電鉄が経営していた時代のことです。

私が初めて見た宝塚は昭和21年11月、宝塚大劇場が再開されて半年ほど経っていました。題名は「センチメンタル・ジャーニー」、覚えているのは客船に見立てた大きな黒い幕の下を出帆のドラを鳴らしながら走る人の姿とフィナーレ位です。ドリス・デイの歌った曲もあつたかどうか？

後で調べたら「舞踏会の手帳」を下敷きにし、神代錦、越路吹雪出演、客船はクイーンメリー号だそうです。叔父から宝塚で何を見たのと聞かれ、つい「セントラルベーカー」と答えて大笑いされました。叔父によく連れて行ってもらった、三宮にあるクリームパウンが美味しいパン屋で、生まれて初めて食べたソフトクリームも美味しかったです。

その後、年に3回位は母に宝塚へ連れて行かれました。公演は通常二本立てまたは三本立てプラスお目当てのフィナーレ、午前開演で長い昼食休憩があり3時

もの、外見は宝塚に全然似合いませんが、「女の園」でなんとかやっていたようです。

母が父から聞いた話として、同年配で大先輩の天津乙女からは「ちよつと、おっちゃん」と呼ばれていたようですが、他の団員は普通に接してくれていたようです。後に曾我廼家明蝶の奥さんになった黒木ひかるのことを、あの子は良い子だと褒めていたそうです。

三年生の時でしたか、一人で宝塚へ行き通用門の守衛さんに「奥田の息子です」と言っ入れて貰い、動物園に行きました。園内で遊覧ボートが沈没したらしいとの噂が流れ、野次馬に行くと父が居り、タオルや衣類乾燥の手配を係員にテキパキ指示しておりました。

定員超過で水が入りましたが、水路も浅く大事に至らず済んだようですが、父の勤務中の姿を見るのは最初で最後でした。

父は昭和25年には阪急本社に戻りましたが、昭和26年10月病に倒れ、そのまま亡くなりました。48歳でした。倒れる1週間前までは会社に出ておりましたが、とても辛かったことと思います。母がいろいろな手続きで阪急本社に行き、最後の社員家族乗車券や

父が手配していた歌劇の切符なども受け取って来ました。母も父のことを想いながら、供養も兼ねて、宝塚には引き続き行く積もりだったようです。

母と行った宝塚

「春のおどり」にはほぼ毎年行っていたので省略

昭和21年

センチメンタル・ジャーニー 神代錦 越路吹雪

昭和22年 南の憂愁 モンパリー

昭和24年 鏡獅子 天津乙女

昭和25年 12月に宝塚おどりもありました。

昭和26年

初の一本立て「虞美人」凄い人気で3ヶ月のロングランになりました。その割に並べば当日券も買えていたようです。プロローグで赤い花をバックに項羽(勿論春日野八千代)と虞姫(南悠子)を囲んで踊り歌われた「あかいけしの花」は忘れられません。劉邦は神代錦、富士野高嶺も貫禄ある武将を好演。母も大好きで二回観ております。

昭和27年 源氏物語 勿論光源氏は春日野八千代、

若紫の八千草薫が可憐でした。

千二小低学年の頃に観た清川はやみ(昭和5年入団25期)のことをずっと覚えております。演目は忘れましたが幕間に若手多数に囲まれてやったコントです。おどりのテンポが余りにスローなので合わせるのに苦

少々横にそれますが、昭和36年には映画「ウエストサイド物語」が封切られました。一緒に行く彼女もないので、中学生の従妹と梅田劇場に行きました。プロローグのジェットとシャークの不良少年達による格好良く力強いダンス、後に続くトニーとマリア(ナタリー・ウッド)のラブストーリー、リタ・モレノが歌った「アメリカ」、素晴らしい映画でレコードを買って帰って来て何回聞いたことか。

宝塚で上演されたのは昭和49年、古城都のトニー、八汐路まりのマリアです。冒頭の不良少年による素晴らしいダンスを、宝塚でどう再現出来るのか心配でしたが、結構格好良く踊れたようです。八汐路まりのマリアは何としても観たかったです。東京転勤準備などでダメ、好評で翌年にも再演された様で、残念無念はさておいて嬉しく思いました。

タカラヅカの花名と百人一首

宝塚唱歌隊(後の歌劇団)創立以来、小林一三翁の発案で隊員(団員)の花名は全て百人一首から付けられたそうです。ただ、私の知っている第二次世界大戦後に

労すると散々いじめられ嘘泣き?も、最後は「のろま」だから「おそみ」に改名したらで終わり、知ってるお客さんはそこで拍手、お決まりのギャグみたい。橋本氏によると、歌のうまい男役、軽妙な演技で三枚目でも実力発揮とあり、副組長もやっています。

その後阪急電車の広告だけで、宝塚の演目や出演者を知る日々が続き、やっと大学入学の昭和34年から、一人で幾つかの公演を観ることが出来ました。

昭和35年8月 華麗なる千拍子 寿美花代

昭和36年9月 三銃士 那智わたる 内重のぼる

藤里美保 新人公演の予習として

昭和36年 三銃士 後述の吹田一中同期生の方々の

新人公演

伝手を頼って入手した切符が何とかぶり付き、山本栄美子さんのダルタニアンが剣を鞘に収めようとして、なかなか入らず慌てていたのを、すぐその前でハラハラしながら見ました。大勢で踊りを踊った中に、とても目立つ子がいました。名前を調べたら「八汐路まり」、この期でトップになったのは後は高城珠里位なので、小生の目も少しは肥えていたかなと、ずっと後になって勝手に自賛しておりました。

はタネが切れて、いろいろな命名法があったようです。例えば「白バラの君」春日野八千代の名前も百人一首由来ではないようです。

春日野八千代には「白きバラの抄」、「悔いなき一本道」などの著書あり。

私が宝塚へ行きだした頃に知った、百人一首由来の花名はそれほど多くはありません。千二小低学年の時ゲームも余りないので百人一首を引っ張り出し、「坊主めぐり」をして覚えたものです。

天津乙女、小夜福子、富士野高嶺、神代錦、霧立のぼる、有馬稲子(二代続いています)、雲野かよ子など。

富士野高嶺 昭和3年入団18期生は不思議と印象によく残っています。重厚な男役で定年退団後花柳緑春として日舞の師匠で活躍。文才に恵まれ「宝塚日記」、「ザ、吹き寄席 宝塚」、「今昔 たからづか 花舞台いつまでも」など著書多数。

千二小で高学年になると、国語の時間に「百人一首」を實際に取る事があり「あまつかぜ・・・」、「たこのうらに・・・」、「このたびはぬさも・・・」(これは少々難しい)は前に並べて確実に取りました。

ただ、その後百人一首由来の名前が途絶えた訳でなく、全てを調べた訳ではありませんが、40期前後でも百人一首由来の名前が綿々と続いておりました。住ノ江夢路、静花翠、有明月子、九重咲子、大江幾野、竜田錦 等々枚挙にいとま有りません。

身近な元タカラジエンヌ

大久保千尋さん 美術学校を志望されていましたが、病気で受験出来ず断念、宝塚へ。

千果子(チーちゃん)昭和31年宝塚音楽学校入学、44期生 昭和32年歌劇団入団 昭和36年退団

スカウトされ文芸作品に力を入れていた松竹に入社、ところが松竹が京都撮影所での制作をやめたので、再度スカウトされ東映に入社、当時の時代劇の大物スター近衛十四郎、月形龍之介と多数共演。映画出演に当たり芸名を蘭千雅子に改めておられます。

東映は大久保さんにとって思い出深いところでしたが、その後の路線変更もあって、これは自分の思っていた映画の世界と違う、と思ひ悩みフリーになって、東京で女優を続けられることになりました。

けれど、画家への希望が断ち切れた訳ではなく、「三十歳をめどに」と思われていたようですが、女優業の方

されており、このポスターは阪急電車に飾られることはありませんでした。阪急百貨店の個展でも近鉄関係の「奈良シルクロード展」の文字は入れることは出来なかつたそうです。全国のJR、東横線、名鉄、九州の方も含めて5万枚のポスターが貼られたのに、育つた阪急関係では全く無視、この点は阪急の伝統的な頭の固さです。全く無関係の話ですが本稿でも掲載許可ももらえず、舞台写真は一切無しとなりました。

ご主人は有名な洋画家 故森秀雄氏(2012.9.20 七十七歳でお亡くなりになりました)です。

スーパードリアリズムとかフォト・リアリズムと呼ばれる、エアブラシで絵の具を吹き付ける独特の画法で、多数の作品を残されています。「偽りの青空」シリーズは特に有名。森ブルーという独特の青色を使い、これはシニール・リアリズムではと思います。

現在、これまでの舞台や映画出演を生かした、キャラクターデザインという、テレビドラマなどのキャラクターを衣装から髪型、小道具に至るまで総合的にデザインする、やり甲斐のある仕事もやっておられます。

平成9年11月15日、銀座ライオン七丁目店で開かれた千里山会創立総会でのこと、私達24回生の席に大久保

も不完全燃焼みたいな感じで、もう少しやろうと思われ、次のめどを四十歳にされました。東京ではテレビや舞台に出演されましたが、舞台は地方公演があるため絵に集中することが出来ず、テレビ中心に出来るよう仕事を調整してくれるプロダクションに移ったりされて、少しずつ絵を描き貯められました。

そして当初の目標通り、四十歳になった昭和53年、東京セントラル美術館で個展を開き「シルクロードの画家」としてデビューされました。「カッコ良く轉身した様に見えるけれど、自分の中では夢の実現と不安でいっぱいでした。でもすぐにギャラリイが付き、ラッキーに來られました」と当時を振り返っておられます。シルクロードの終着点奈良から描き始め、シルクロードの国々へも足繁く訪れておられます。中央アジアの国々、そして現在では絶対に行けないアフガン、レバノン、イラン、シリアなども含まれています。

阪急百貨店で個展をしていた時、作品がNHK主催「奈良シルクロード展」(昭和63年4月〜10月)の準備委員会の目にとまり、ある巨匠とともに候補に挙がり、大久保さんの作品がポスターに採用されました。お墨付き「シルクロード作家」の誕生です。

阪急電車のつり広告は阪急関係企業の広告のみに限定

さんが座られました、21回生の出席はお一人だけでした。一目見て宝塚??とピンと来て「失礼ですが元宝塚?」と伺ったらバツチリでした。残念ながらその時には時間が無くて、宝塚の思い出などは余り伺うことは出来ませんでした。

吹田一中同期生

私の同期生から二人の方が昭和31年高校入学後初の夏休みが終わった途端、退学して宝塚音楽学校へ入学されることを知りました。お二人は昭和32年宝塚音楽学校入学、45期生 昭和34年 歌劇団入団です。

お二人とも優秀な成績で音楽学校を終えられたのですが、3・4年後に退団、結婚されています。音楽学校は最高の「花嫁学校」との定評を実践された形になりました。

山本栄美子さん 春日丘高より 末広 栄(エミちゃん、エミー) 昭和38年退団

お医者さんと結婚されたと聞いております。

千二小でも一緒でしたが同じ組になったことがなく、殆ど面識はありません。母上はよく遠足などの学校行事に付き添われ、スラッとした綺麗な方だったので、母親達の間ではあの方は宝塚出身ではないかとの噂もあつたようです。何人かの方に確認したところで

はノーでしたが。

橋本雅夫氏によると退団直前の昭和38年には本公演「河童とあまっこ」で主演されました。

長谷川晴子さん 茨木高より 望 千晴(オハル)
昭和37年退団 実業家と結婚され、鎌倉にお住まいです。

吹田一中では組が一緒になり、茨木高の在京者同期会にも毎年出席され、よくお話をしております。何十年かぶりでお目にかかった時、白いスカートを格好良く巻いて現れたので、元宝塚とすぐ判るよと冷やかしました。いつまで経っても大久保さん同様、宝塚の雰囲気は消えないものです。千里山会にもご出席いただき様お誘いしています。

その他千里山出身の方

阪急電車で通学・通勤をしていた時、時々グレーの制服の音楽学校の生徒さんを見かけました。見知らぬ方なので名前も分かりませんが、結構何人か居られたようです。会員の方でご存じの千里山出身のタカラジエンヌが居られましたら、本名と芸名を編集部にお聞かせ下さい。

従業員慰安行事

昭和39年のことだったと思います。会社の従業員慰安行事として、宝塚観劇会があると知り、母にせめてもの親孝行をするべく切符を2枚もらいました。当日は母も着物を着て盛装、何時もの勝手知ったる一階席なら問題ないのに、先ず座席を探すのにウロウロ、エレベーターに乗って四階迄上がりました。見つけた座席はなんと後ろに2・3列しかない天井桟敷、母はこんな高いところから、谷底みたいな舞台を見るのは初めてで怖いとブツブツ文句を言っておりました。

この辺は昔は音楽学校の生徒さんが公演見学に来て大声でスターの愛称を叫ぶ場所でした。私もこれは双眼鏡を持ってくるべきだったと、反省しても後の祭りです。お昼に幕の内弁当を食べて、母も少し機嫌を直しましたが、フィナーレでは大階段の上の方は見えななし、スターの顔もよく分からなかったと、家に帰っても文句を言っておりました。いつもの席とは大違い、未だ稼ぎのない新入社員に残り物の席を渡されても文句は言えません。舞踊やダンス中心なので「春のおどり」かなと思うのですが、演目もよく覚えておりません。

その後仕事が忙しくなり、ロスアンゼルス、ニューヨークなどの駐在もあったので、これが私の最後の宝塚観劇でした。ニューヨークでは観劇の対象を「歌劇」

26山口輝子さん 梅花学園より 巽 洋子(のち

弘季に改名 ヤマちゃん、ヤーク)
47期生 昭和36年入団 昭和43年退団 旧東町会、現在の千里山西に住んで居られました。

会員の26川原一恵さんに教えて頂きました。芸名が違うので大久保さんに、関西在住の同期生の方にご確認頂き、途中で改名されたことが判りました。

社会人になって

宝塚関係物故者慰霊式

昭和38年貿易商社に入社した年、宝塚関係物故者慰霊式の招待状が届き、数珠を持って宝塚ホテルに行きました。父と、昭和33年4月1日に舞台の事故で亡くなられた香月弘美さんのことを想いながら手を合わせました。

パーティー会場には音楽学校の生徒さんがグレーの制服姿で沢山いて、参会者のお世話を一生懸命やってくれました。礼儀正しき、言葉遣いなどさすが音楽学校です。

余りお話しするネタもありませんでしたが、中学で末広栄、望千晴と一緒に話すと退団されたことも知ってる子が何人かいました。

から「オペラ」に切替、メトロポリタンオペラの定期会員になり、シーズン中は妻も連れて毎月行っておりました。

ニューヨーク駐在中に観たタカラヅカ

ラジオシティミュージックホール公演

1989.10.25 - 29

松本悠里、天海祐希、大浦みずき、紫苑ゆう他

総勢61名の大公演でした。

TAKARAZUKA DANCE FESTIVAL(宝塚をどり讃歌)
タカラヅカ・フォーエヴァー

少し横道に逸れますが、妻も千二小時代何度も宝塚に連れて行ってもらったようですが、その後千里山を離れたので宝塚と縁が無くなりました。結婚して千里山に居た時は私の仕事が忙しく、一緒に宝塚見物など出来ませんでした。結構宝塚通で「虞美人」観たよ、「あかいけしの花」も覚えていると言っておりました。

平成18年宙組のトップ娘役になった紫城るい(83期平成9年入団、19年退団)は妻の菓大の同級生小林俊雄君の娘さんで、ずっと公演の案内などが来ていたし、

退団されて舞台上で活躍されている時（オフィス・ミヤモト所属）には、池袋の東京芸術劇場で2回ほど拝見しました。終演後には挨拶に来られて、宝塚のスターに直接お会いしたのはこれが初めて最後でした。

ラジオシティミュージックホールには、会社が休みの10月28日か29日に妻を連れて行ってきました。29日は千秋楽？で大きなさよならパーティーが有ったはず、28日だったと思います。

せめてもの罪滅ぼしに一番良い席を買って、観に行きました。私達が行った日は何と6千人（宝塚大劇場の定員の2倍）入る劇場が満員（普段はガラガラなのでSOLDOUTの看板が見つからず、大混乱になったそうです）、アメリカ人も沢山居ましたが、やはり日本人が殆どでした。隣の州のニュージャージー、コネチカットは勿論、ワシントンDCやボストンから駆けつけた人も居ました。6回の公演で3万3千五百人の入場者があったとか、毎回ほぼ満席です。

満開の桜を背景に、美しい着物姿で舞い踊る「宝塚をどり讚歌」で始まり、歌と踊り満載の宝塚調レビュー、ラインダンスも迫力満点で時間が経つのも忘れしました。ファイナーレは勿論タカラヅカと同じ大階段を使って全員が登場、完全にタカラヅカに戻った感じ

橋本雅夫氏のこと

橋本氏は「阪急電車の語り部」として、宝塚歌劇と阪急電車に関する本を多数出版されました。平成5年（1993）頃初めて読んだ「スマレの花は嵐を越えて」の読者カードに「私の父も阪急に勤め、終戦後宝塚にも出向していました」と書いて送るとすぐに返事が来て、「お父上とは『勇様』のことでしょうか、私は昭和二十年に阪急に入り父上の下に配属されました。」とあり、文通が始まりました。

私のお師匠様として色々教えて頂き、宝塚、阪急電車、千里山の資料を沢山送って頂きました。

最も重要な資料は千里山人 和田昌允（まさのぶ）氏が書かれた「千里山開発物語 前・後編」の全コピーで、ご息方のお許しも頂き「千里山」5号〜10号に連載されました。和田昌允氏は京阪電車から転じて、同じ部署の次長として机を並べておられたそうです。「千里山」は毎号「千里・佐井寺図書館」にお送りしていましたが、「千里山開発物語」を読みたい人が多く、次号は何時出るのかとの問い合わせがよくあったそうです。

「千里山開発物語」を載せた「千里山」をお送りしたところ大変喜ばれ、記事の中に9 飯島泰蔵さんのお名

す。「さよなら皆様」はやったと思うのですが、妻は「スマレの花咲く頃」が聞けなくて、とても残念と申しておりました。私達にとつてタカラヅカと言えば「スマレ」なので誠に残念です。

その後師匠の橋本さんに手紙でそのことを書きましたが、植田氏がトップになって以来、平成6年の宝塚80周年式典でも同様のことがあり、オールドファンからお叱りを頂いたとありました。やはりタカラヅカのシンボルは「スマレの花咲く頃」でこれが無くなれば何が残るのか、とのご意見でした。

ただ、「スマレの花咲く頃」は戦前白井鐵造氏が、小林一三翁の命でパリに行き、当時はやっていたシャノン「白いリラの花咲く頃」を持ち帰り、日本では知る人が少ない「リラ」を「スマレ」に置き換えたものだそうです。アメリカならシャノン「白いリラの花咲く頃」を知る人は圧倒的に多いはずで、誤解を招かぬ様、外した可能性はあります。

前を見つけられて、よく存じ上げておりますとの礼状を頂きました。

大久保千尋さんのことは在籍中からよく存じておられ、著書の一冊の表紙画を書いて頂いたそうです（素晴らしい宝塚歌劇 夢とロマンの85年）。

略歴 昭和20年9月和歌山経済専門学校（現・和歌山大学経済学部）を卒業。同年12月阪急に入社。運輸部、事業部に勤務。昭和31年1月宝塚へ出向、東京出張所長、出版部長、プロデューサーなどを歴任。平成6年宝塚歌劇団発行の『宝塚歌劇80年史』などを執筆、平成8年からフリーの著述家となる。
(1925.5 ~ 2017.9.19)

橋本氏の著作一覧

サ・セ宝塚 読売新聞社 1986
スマレの花は嵐を越えて 読売新聞社 1993

阪急電車青春物語 草思社 1996

大阪の電車青春物語 草思社 1997

素晴らしい宝塚歌劇 夢とロマンの85年

阪急電鉄 1999 （大久保千尋さんが装丁をされました）

宝塚歌劇今昔物語 タカラジェンヌよ永遠に
小学館 2002

その他の宝塚関係出版物

すみれたちの第二幕 I・II

宝塚卒業生達は今 名取千里・武市千秋／編著

恒友出版 1996

Iには大久保千尋さんのことが載っております。

宝塚、わがタカラヅカ 植田紳爾 白水社 1997

参考書籍

阪神急行電鉄二十五年史 昭和七年

京阪神急行電鉄五十年史 昭和三十四年

二代目宝塚大劇場

